

『教祖のひながたの道すがらは、陽気ぐらし世界建設の人材であるよふぼくを育て増やすことそのもの』(訓話集76巻35p)

と仰せられ、翌年の立教180年8月より、おちばにおいて後継者講習会が、また、その年の初めより、各直属教会で会長子弟育成プロジェクトが開始されました。この活動は

年祭後の歩みをお示し下された目標であります。その最中、7月にかんろだいが倒されるという節をお見せ頂きました。(かんろだいについて) 話は少し外れますが、

教祖のご在世当時は、皆様もご承知の通り、おつとめの完成を急ぎ込まれております。と同時にかんろだいの建設も急がれているのであります。かんろだいについては、明治2年おふでさき第2号にはじまり、(2号39参照) 明治6年に、飯降伊蔵先生に板張りの模型をお作らせになり、明治8年陰暦5月に、ぢば定めを行い、こかん様身上の際に初めて据えられお願いづとめがつとめられました。更におふでさき第9号において、詳

細な寸法を示され、明治14年かんろだいの石普請が始まります。ところが、石工がいなくなることで、頓挫してしまい、翌明治15年警察により、2段まで出来たかんろだいが没収されました。おふでさき第10号に

このだいをこしらゑよとて たんに 月日人ぢうのもよふするなり (十 29) 人ぢうがしかとよりたる事ならば そのまゝだいでける事やで (十 30) これさいかたしかにかけた事ならば 月ゝつとめちがう事なし (十 33) つとめさいちがはんよふに

なあなたなら 天のあたゑもちがう事なし (十 34) とあります。かんろだいの普請に伴いつとめ人衆を寄せる事を仰せになり、更にかんろだいが完成すれば、つとめも完成し共に親神様の御守護も十分に天の与えとして、下さると教えられております。しかし単に人が寄るのではなく親神様の思いに叶う人材を求めていると仰せられております。更に第17号には、このたいがみなそろいさい

したならば どんな事をがかならんでなし (十七 10) それまでにせかいぢううをとこまでも むねのそふぢをせねばならんで (十七 11) とありますように、かんろだいが完成すれば、どんな事でも叶うと仰せられておりますが、それまでに人々の胸の掃除を急ぎ込まれております。この明治15年の取り払いの後、

「いちれつすますかんろだい」のお歌が、「いちれつすましてかんろだい」と改められた所以であります。少し話は外れましたが、立教180年の春季大祭で真柱様は、

『二段目と、二段目を残して倒された姿を見て、かんろだいの石普請が頓挫に次いで取り払われた史実が思い浮かんだのであります。そして、各段をつなぐほども破損し、据え替えまでの仮復旧もできなかつた状態からお互いの心のつながりが欠けているとお知らせのようにおもえたのであります。一手一つになれとお仕込みだと感じたのであります。』

成という目標を頂きながら、それを実践する我々の胸の掃除や、一つの目標に向かう私たちの心のつながりの欠けているさまをお見せ頂いたものと思わずにはいられません。更にその年は、真柱様の御身上を通して節をお見せ下さりました。これが2つめの大きな

柱様の御身上が長期に渡り、おさづけを頂けないという状況が約1年程続きました。よふぼくの誕生をお見せ頂けない状況になりました。また少し話を外しますが、おさづけについて、

教祖伝第3章みちすがら(47p)に 一元治元年の春から、教祖は、熱心に信心する人々に、扇のさづけをわたされた。」と記されております。更に、扇、御幣、肥まるきりと、道の路銀としてのさづけをお渡しになつております。更に、教祖伝第6章ぢばさだめ(124p)に、

りかんろだいてをどり榊井と、四名の者に、直々、さづけの理を渡された。」 これからハいたみなやみもできものも いきてをどりでもみなたすけるで (六 106) このたすけいまゝでしらぬ事なれど これからさきハためしゝてみよ (六 107) どのよふなむつかしきなるやまいでも しんぢつなるのいきでたすける (六 108) さづけによつて、どのような自由自在の守護をも現わし、身上たすけのためにさづけを渡された始まりである。

と記されております。このように、御在世当時はもちろんのこと、現身を隠されて後もご存心の理を以つて私たちに尊いおさづけの理をお渡し続けて頂いておりましたが、真柱様の御身上を通してお渡しできなかつたことを考えますと、私たちよふぼくが、親神様の思召、教祖の御教えを信じ切る心が足りない故にお見せ頂いたのではないかと思われまます。おふでさき第3号に、

「一に、いきハ仲田、二に、煮たもの松尾、三に、さんざいてをどり辻、四に、しつくとりとるなり (三 7)